

# 親族関係の地域的存在形態

—非同族型村落の事例研究—

関 谷 龍 子

## はじめに

従来からの社会学による家族・親族研究は昭和初期以来、各地の農村の実態調査に基づいて多数の実証的成果が累積されてきた。とりわけその中でも有賀・喜多野両氏に代表される同族研究は、「同族」を以て日本特有の形態を示す学術用語に昇華せしめたと表現するまでもなく、家族論にとってもまた地域研究の上でも欠くべからざるものである。

家連合としての同族団の解明の延長は、それらの経済的・権威的支配関係を通して村落構造をも刮目させるものであったが、今日までの理論的把握によって、日本の親族体系はこの「同族」及び「親類」という二つの異質な体系の同時的展開

として捉えられるようになった。両者はその存在する社会構造の中で異なった機能を分担し、相互規定的な機能的連関をもつて共存するのである。<sup>(1)</sup>これは「共生理論」と呼ばれ、そこから、両者の親族類型が相対的に優劣の位置を占めることで全体としての親族体系の性格が決定されるという「優位性理論」が導かれる。この優劣の差異による親族類型は、共時的視座によって地域的ヴァリエーションとなり、通時的視座では親族組織の変動として捉えることができるのである。<sup>(2)</sup>これらの親族類型は、光吉利之によれば、A型（同族優位型）、B型（規定的親族優位型）、C型（任意的親族型）に分類され、

B型は更に二つのサブ・タイプに区別される。このうちA・B型共に「家」を構成単位とした父系出自体系であり、「親類」からみれば規定的双系親族体系の性格をもつとされ、C型は「家」の解体と核家族的構造原理の顕在化を前提とし、産業化・都市化の過程に対応したものとされる<sup>(3)</sup>。

これに対し、地域的ヴァリエーションによる親族類型として、蒲生正男の類型論が存在する。この類型論は同族と親類の共生を前提にはしておらず、親族を次のように理解している。すなわち、親子関係（filiation）の認知の結果として出自（descent）を共通にする関係が親族であり、出自を規定する出生は婚姻に原因を求められる。ここから、親子・兄弟姉妹及び夫婦関係を契機とした出自の共通によって親族が規定されるのである<sup>(4)</sup>。そして、マキ型・ジュイ型・イットウ型・ハロウジ型の四類型がより地域的ヴァリエーションとして設定される<sup>(5)</sup>。このうち前三者は父系出自、ハロウジ型は多系出自であるが、蒲生はこれら四類型間での時間的変容を考慮した場合、相互転換の可能性は存在しないと述べている<sup>(6)</sup>。これは日本社会内部の異質性・構造的差異をより比較社会的に捉えようとする意図によるものであろう。

本稿は以上のような問題点をふまえつつ、従来の親族研究に於て「同族」というカテゴリーで捉えきれない構造を持つ

た地域の親族（kinship）についての理解をめざそうとする報告である。特にそれは、光吉の類型よりも蒲生の類型の裡に分析可能な様相を多く示している。とりあげた調査事例地域は親族に加えて、家族制のひとつの特徴として婚姻及びそれに関連する隠居制、世代原理の要素を対象に据えた分析が必要になってくるのであり、それが親族の規定や理解にも密接に関連してくると思われる。

### 一、行野浦地区の概況と同族集団の欠如性

本稿で調査対象に設定したのは三重県尾鷲市の行野浦地区である。同地区は戸数六〇軒、人口一六四人（一九八五年三月現在）の極めて小規模な漁村である。尾鷲市の中心部から自動車で約十分の所にあり、地区中の多数が漁業に従事しているが、若年層の他出による高齢化の傾向が窺える。明治二二年に九鬼早田との合併により北牟婁郡九鬼村となり、それが昭和二九年に尾鷲町他三村と合併して尾鷲市が成立している。現在は地理的にも自律性を有する漁村として、行野浦区としてのまとまりを保っている。地区内には八幡神社の他、稲荷神社、恵比須神社及び曹洞宗永林寺があり、ホンマチ・イドマチ・カワムコウ・シンマチの四つに区分されるが、この区分は地理的区分であり、近隣組織を形成するには至って

いない。また、行野浦公民館及び行野浦漁業協同組合の建物が地区の中核的存在となっている。

人口は一七七五（安永四）年に十八軒二五人であったものが、一八五五（安政二）年には三七軒一六〇人と軒数が倍増しており、その後一九二三（大正十二）年に五〇軒、一九五二（昭和二七）年には六六軒、そして一九六六（昭和四一）年には七三軒、二八三人であった。一九六六年までの資料は軒数人口共に増加していたものが、現在は前述のように減少傾向にあることが判る。

現在の戸数は六〇軒だが、行野浦には区としての成員であ

表 1—1 行野浦の家族員数と世代数

員数 世代数	1	2	3	4	5	計
I	9	18				27
II		2	15	10	3	30
III					3	3
計	9	20	15	10	6	60
(%)	(15)	(33)	(25)	(17)	(10)	(100)

表 1—2 行野浦の家族員数と世代数  
(ホンヤクのみ)

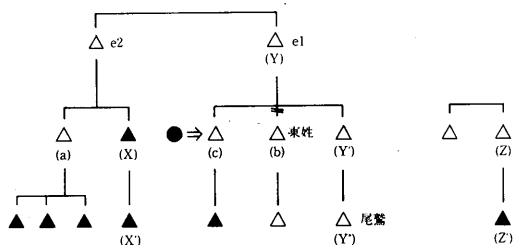
員数 世代数	1	2	3	4	5	計
I		15				15
II			11	9	3	23
III					3	3
計	—	15	11	9	6	41
(%)		(36)	(27)	(22)	(15)	(100)

ることを示すホンヤクという制度があり、ホンヤクでなければ区の総会や区有財産に対する権利を得ることができない。ホンヤクは一九八五年三月現在四一軒であり、残り一九軒は区の成員として認められていないのである。

ここで表 1—1 をみてみよう。表 1—1 は六〇世帯の家族員数と世代数の相関図であるが、単独世帯が九世帯もあり、一世代二人も二十世帯と、この両者で五〇パーセント近くを占めている。一世代二人というのは殆ど子女が他出して夫婦のみとなっている世帯である。これと、ホンヤク四一軒のみのデータを示した表 1—2 を比較してみると、単独世帯と二世代二人の世帯がなくなることが判る。このことから、ホンヤクでない世帯（ムヤクと呼ばれる）が老人の独り暮らしや二世代世帯の欠損家族（母子のみ）に多くみられることが判明する。これは、後述する家族構造の特質、特に隠居慣行が明確な形でないにせよ存在することと深い関連を持つものであり、この地区を含めた熊野灘沿岸地域の地域性を念頭に入れた視座が必要となると考えられる。

さて、この地区内の姓は岩崎の十一軒をはじめ東十、浜田・仲各々八、仲本七、西六などとなっているが、同姓間の家々による本分家関係について言及しておこう。これら同姓間の家々はいずれも殆ど父系出自としての系譜的紐帯を確認

図1 仲姓8軒の系譜関係



▲は現在の各世帯主

することができ、それらの多くは二世世代間のみの関係であり、最大でも三世代間である。すなわち本分家関係が二、三世代という狭い範囲にいずれも限定されるのであり、一系的な連続性を有する本分家関係は形成されていない。本家はホンヤ、分家はインキョと呼ばれており、本家の本家或いは分家の分家のカテゴリーを示す用語は存在しない。家の継承は多くの場合長男（アニキ）となっており、この点では単系出自としての父系性が重視される。仲姓を例にとると、現在の八軒は、そのうちの八軒(X)からみて息子一、イトコー、イトコの子一、オイ三、系譜関係のないもの一という内訳であり、分家とされる家の分岐独立がいずれも極めて新しく、明確な同族結合の展開される地域にみられるような近世以来の系譜的認知をもった連合はない。系譜的関

係のない一軒についても、ヂルイ・チエン等の folk terminology で示される時間的経緯の不明確な系譜的認知もされていない（以下図1参照）。また、本家筋の継承者にあたる(a)は尾鷲市内に他出して当地には住んでいない。他出は土地の狭隘性と職業的機会の稀少性から考えても然るべき現象であるにせよ、本家筋が他出しているという状況は本分家の親和的結合を妨げる要素となりうるものであり、以下に述べる本分家の有機的連関性の把握にとっても注目すべきことであるといえよう。またこれらのことは仲姓以外の姓による本分家関係においてもみられることなのである。

そこで、この仲姓の本分家を例に、その結合形態について更に検討してみる。同族結合の要素である同族間の生活連関は、本家の分家に対する経済的庇護や権威的統制、相互協力、また人間の一生を通して現出する諸儀礼とそれに伴う冠婚葬祭、病氣・災害の互助や、祖先祭祀等をそのメルクマールとすることができ、行野浦ではこのうちでも重要な要素となる経済的庇護・統制関係を析出することができない。そこでは、系譜関係に基づく権威的統制・承服という同族結合の本質の欠如がみられるのであり、かかる点のみでも同族という規定を与えることが困難となるのであるが、同じ要素である冠婚葬祭・祖先祭祀等についてその連関を示すことにしよ

う。

仲姓の本家筋の継承者(Y)の家は尾鷲在住であるが、(Y)は既に死去し、現在は(Y)の世代となっている。従って現在の社会的交際は、前述の通り(X)を中心に据えて考えると、(X)と(Y)の間である。この場合、(X)は(Y)の家で執行される法事・年忌には出席を行っている。(Y)の孫が四〜五年前に死去した例では、葬儀当日及び、四十九日目の法事(当日及び前日・トイヤと称される)に出席した。これにはカナイ、とりわけ兄弟など及び(X)の息子(X)も出席したという。カナイについては後述する。この事例では死者が幼児であったためか葬儀・法事に対する明確な出席のカテゴリ―認知を得ることができなかったが、(X)が一般的にそれを認識した場合次の通りであるとされる。

葬儀の後法事には三日、七日、四九日、百ケ日、一年忌、三年忌があり、ここまでは各々トイヤが行われ、各々二日間とも出席する。またその間に初盆がある。以上すべて(X)及び(X)は出席する。初盆以降の盆の法要は、オジ等のカナイのみが出席するのであり、各人によってもまちまちである。また当事家が行野浦内に居住していれば(X)に加えて(X)も参加するという。これに個々具象的な家を想定した認識によれば、(X)の妻の実家で葬式がおこった場合、行野浦内であれば(X)が出

席する。また、系譜関係を有しない唯一の仲姓(Z)で行われた場合、葬儀当日の他、百ケ日や初盆まで(X)が出席する。葬儀・血縁関係のないコウサイの家でも、百ケ日までは出席する。また(X)のイトコ(東姓)には(X)が出席し、百ケ日、初盆までは行くという。以上はいずれも初盆以降の盆参りには参加しないが、それに参加するのは(X)の妻の実家の場合に限定される。

葬儀・年忌についてみてきたが、この地域では正月年頭相互に親戚を招待し合う慣行はなく、盆礼も極めて限られている。初盆以降も必ず参るのは前述のように妻の実家(村内)のみであり、他地区であるとはいえ本家筋の法事にも必ず参加はしないのである。また、その他の生活連関のうち同族神や同族の祖先祭祀という共同祭祀等も存在しない。それに関連して注目されるのは、分家が新しく独立する場合に必ず「センゾサン」といって、仏壇をつくり、創立された家の始祖ともいえる位牌を本家から持ってきて祀る慣行である。その位牌は、ある家の例では昭和二年に生まれ四ヶ月後に、また昭和四年に生まれ翌年に夭逝した二幼児のものであり、一人前と認められる前或いは、人間の生命として認められる前に死亡した霊を、新たな家の創出にあたって始祖に据えるものである。すなわち、分家の分岐にあたって新たな始祖―家

の象徴——を設定するこの慣行は、本家を中心に家々の統合をはかるための連鎖が切断され、分家には継続されないということであり、そこには超世代的な先祖観や本家の統制が形成されないことを示すものであろう。始祖として祀られる者が、本家のタイム・スパンにおいて然るべき位置を占め世を去った人間ではなく、その「家筋」から飛び出した無縁霊に設定されることは本家「筋」との矛盾を調和するものであり、幼児の「生」の再生を新たな家の誕生の生命力として、期待したもののとも考えられよう。

この他、漁撈における協同を示しておく。それはトモヨと呼ばれ、かつての伝統的漁法であったエビやムロのサシアミ等の場合、一隻の船に二〜三人でトモヨにより乗組んだ。乗組む相手は場合により異なったが、(X)の例ではイトコに当

図 2-1 トモヨの例(1)

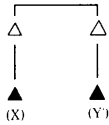


図 2-2 トモヨの例(2)

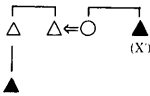
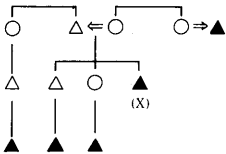


図 2-3 定置網の雇用関係



る(Y)と乗り組んだという(図2-1)。また(X)の場合では、(X)の姉の夫のオイ(いずれも村内)との協同であった(図2-2)。また、トモヨではないが(X)の経営していた定置網では図2-3に示したような親族四人を雇用していた。父母双方の姉妹という婚出女性を媒介とした二人が含まれていることが留意されるべきであろう。

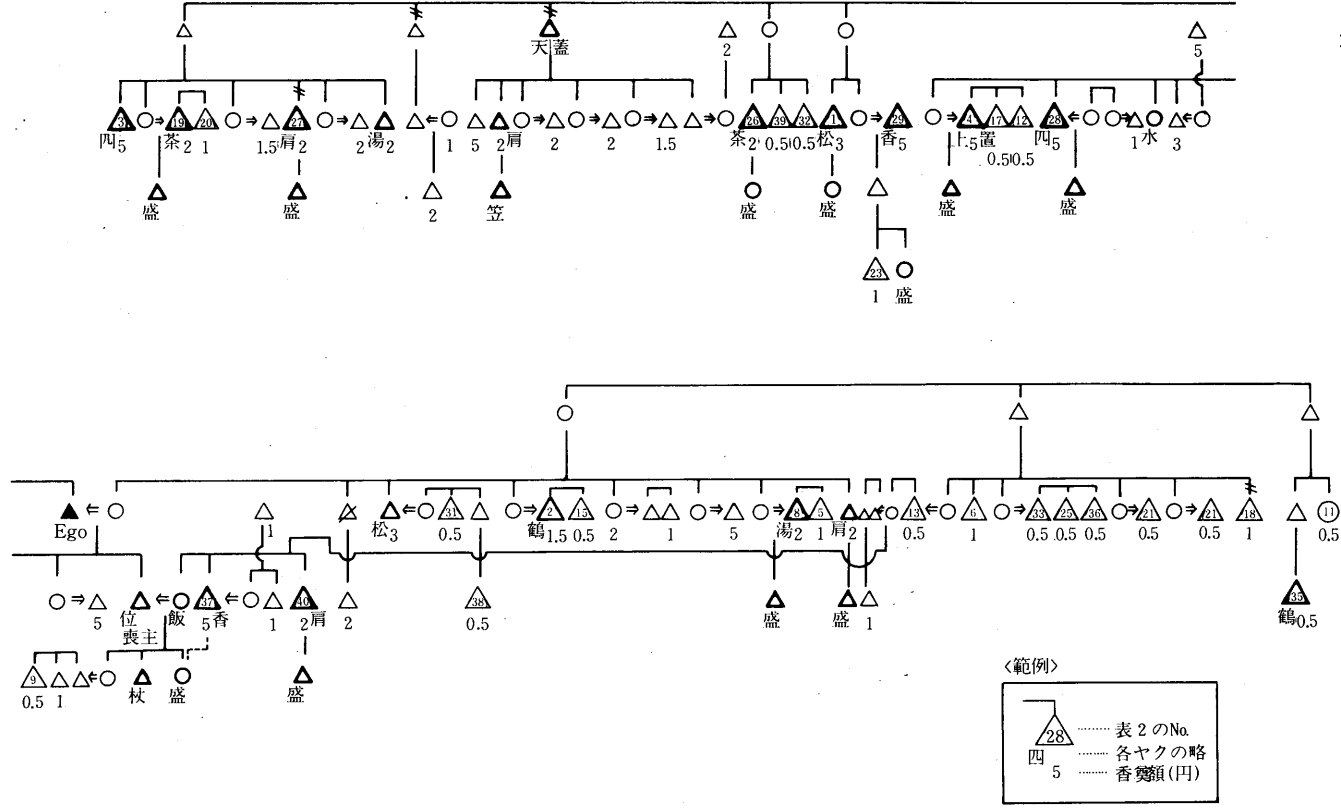
なお、子供の出産については初産から婚家で行ない、嫁の実家の親が来てくれることはなかったが、出生児の名付けの際には婚家(夫方)の父母双方のイトコに当る者を祝いに呼んだという。

## 二、行野浦における親族の展開

次に、同族集団の欠如した父系出自を前提とした上で、親族関係の把握を行ってみたい。

図3は昭和十五年三月にR・N氏が死去した際の香奠帳から、香奠を寄せた人々とヤクの担当者(親族図に表わしたものである。ヤクとは葬儀の際、葬列に各々の「モチモノ」を持って加わる役目の人々のことで、天湯、天茶、鶴亀、香爐、松明、上置、四花、位牌、天蓋、飯、水、杖、笠、肩、盛物という構成になっている。ここで、この地域の葬送の概要に触れておこう。死者が出ると仏壇のある「ヘヤ」に北向きに

図3 R・N氏葬儀と親族関係



寝かせ、身内の妹等がユカンをする。僧が来てオツヤ、ヨトギが行われ、村内の人間は殆どお悔みに来る。かつては二人が船で親戚等に死亡をふれて回ったが、その当日午後、葬式が執行される。永林寺本堂の前に棺を据え、モチモノを持った人々が家を出発し、旧道を通じて寺に到着、右回りに三回まわってからモチモノを納める。出棺は家の縁から出るがそれに伴う儀礼はない。棺等は村内中の人々の手作りにより作られる。埋葬した上にはサヤと呼ばれる木製の家型の覆いを立て、これが腐った後に墓石を建てる。埋葬後すぐ寺で三日と七日の供養（ネンキ）を行った後、家に戻り手伝った人々に酒食を振舞う。この後四十九日にヒアケといつて供養を行う。各の供養には村の念仏仲間の老姿（村内の有志）が念仏をあげ、村内の人や親戚が出席する。また各々のタイヤには村中の家に親戚が砂糖や茶などを持って回る。供養はこの後百ヶ日、一年忌（ムカワリ）と続き、その後は三年、七年、十三年、二十三年、二十七年、三十三年、となつて五十年が最終年忌であり卒塔婆を立てるのである。

このような裡にヤクに当たった人々はモチモノを持つのだが、各のヤクは担当すべき人の基準がおおむね決っている。いずれも親族を中心とするのであるが、決定に当つてはこの事例の場合、施主が行った。そのうち最も重要視されるのが天蓋

である。これは喪家のシンセキの中で最も古い（オモイ）シンセキがあたるとされる。また四花（紙花）も古いシンセキが当るとされ、天湯、天茶も重要な人間が担当する。この他、位牌は施主、飯は施主の妻、杖は施主の子、水は施主の妹、上置は施主のいちばん上の姉、笠・盛物はカナイの子供たちがヤクを分担するのである。これらヤクの担当者を親族の中に位置付けてみると、図3の如くなるのだが、分布は死者側の親族にやや傾斜していることが窺える。しかし注意すべきは、このヤクが死者（E g o）にとつて上限が<sup>0</sup>の世代であり、1以上は皆無であることである。それは最重要視されている天蓋に当たった者がE g oの兄（他家へ智養子に入る）であることでも例証されよう。この場合、長兄でない者が天蓋を務めているのは、智養子により他出して居住の近接性のないことが選出されたひとつの理由となつていると考えられる。さて、図3に示してある個々の親族の記号に打たれた番号は表2のNo.に対応している。表2は香奠帳に寄せられた氏名のうち村内からの香奠を寄せた人々の死者との関係及び香奠額を示したものである。この氏名はこの当時村内に住んでいたほぼ全員ということであるが、続柄から判るように、殆どが死者と何らかの関係を有している。これは、部落内婚率の高さとそれによる縁組の交錯が親族関係の連鎖を拡大したものの



表2 R・N氏葬儀の香奠額と関係

No.	香奠額 (円)	死者との関係			
1	3	Z S	20	1	B D H B
2	1.5	W Z H	21	0.5	W M B D H
3	5	B S	22	1	
4	5	D H	23	1	Z D S S
5	1	W Z H B	24	0.5	No.24のW F Bが Sの名付け親
6	1	W M B S	25	0.5	W M B D H B
7	0.5	—	26	2	Z S
8	2	W Z H	27	2	B S
9	0.5	S D B	28	5	S
10	1		29	5	Z D H
11	0.5	W M B D	30	0.5	
12	0.5	D H B	31	0.5	W B W B
13	0.5	W M B D H	32	0.5	Z S
14	0.5		33	0.5	W M B D H
15	0.5	W Z H B	34	0.5	—
16	0.5		35	0.5	W M B S S
17	0.5	D H B	36	0.5	W M B H B
18	1	W M B S	37	5	S W B
19	2	B D H	38	0.5	W B W B S
			39	0.5	Z S
			40	2	S W B

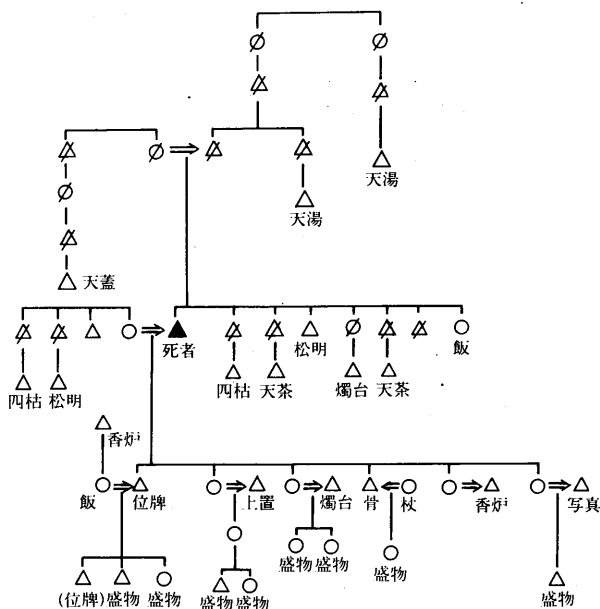
であるが、内婚の多さは村内各家の父系的連続性を阻害させる作用が働くものであり、家觀念及び父系出自集団としての同族の形成はここに於てもその要因を事欠くものとなっている。この四十名の氏名も、更に検討すれば親族的距離に濃淡が存在するのであり、それは香奠の額の相違に示されるもの

である。図3には村外の親族も含めた香奠額を個々人ごとに記したが、E g o側(父方)では長兄の長男が五円の他、実子(その夫)が五円等となっている。また施主の妻方では長男が五円、E g oの妻方ではその比重がやや低いなどとなっている。

図4はS・N家の父母が昭和三十九年及び四十年に死亡した際の事例であるが、ここでもヤクの範囲は死者の<sup>1</sup>以上の世代は皆無である。またヤクの成員も父方に傾斜がみられるとはいえ、四花、天湯、天茶等は双方が均等に分担していることが判る。しかも天蓋は父母いずれの葬儀の場合も母方の親族が担っている。ここでも各のヤクの基準は同様に考えられている。十ヶ月の間において連続した二つの葬儀でも、多少の役割の交代は認められるが基本的に父母双方で変化のないことが判る。これらの点は、親族メタボリズムの視点から、更に次世代の葬儀における追跡が必要となってくるであろう。また図5はI・N家での昭和五十一年に父が死亡した際の事例を示した。同家は姓はNだが本来Tという姓の出自を継承してきた家であり、T家は行野浦の中でも古い家とされている。この事例では天蓋・天湯のヤクが死者の上の世代に逆上って設定されている。天湯の二名はいずれも尾鷲市内の在住者であり、各々の上位の世代において分岐した家筋に当たっている。死者より上位のカテゴリが含まれるこの事例



図5 I・N家の葬儀と親族関係



は、前二例と比しても、行野浦全体としても特殊であるといえ、その理由は同家の相対的資格差に求められよう。すなわち同家の場合、各世代の婚姻が他村からの婚入によっているのであり、これが村外の親族との関連をより重要にさせてい

ると考えられるからである。しかし、この事例の場合でも、天蓋は死者の母方に求められているのである。

ここで、行野浦において親族を称呼する語彙とその内容について触れておく。それは前述のカナイ及びイトウである。カナイとは親族を意味する語であり、「家内」の意で一軒の家族のことも示す。そのカテゴリーはEgoの兄弟、親の実家、本家（ホンヤ）、オジ等であり、カナイであることをカナイドウシ・カナイウチなどと呼ぶ。このカナイドウシでは漁撈活動の際に乗船を共にすることもあり、前述図1の(X)の場合、若い頃には本家である(Y)の家族、(Y)及び(Y)(b)や、(X)の妻のカナイの人などと共に乗り組んだ経験を持つという。

またイトウとは血筋、系統といった意味合いが強く、あまり使用されないが、あのイトウは油断ならない、といった具合に話の文脈の中で用いられるものである。これも(X)に即して示すと、(X)のイトウとは(X)の家と(X)の妻の家をセットにした称呼であり、(X)の本家(Y)のイトウとは、(Y)及び(Y)(b)(c)は分家(c)は贅養子、更には系譜的つながりのない(Z)まで含まれるという。このように本分家に限らず妻の実家も含まれるのであり、妻の側からみれば夫方も妻のイトウに含まれるとされる。カナイ・イトウは父系出自集団を示す用語ではなく、本稿の使用する意味での親族関係を称呼する

ものに他ならない。

### 三、婚姻と世代階層制の原理

さて、親族を規定している出自は婚姻を結果としているが、その婚姻、とりわけ伝統的慣行としての婚姻について記すことにしよう。かつての婚姻では、相手の選択は自由であり、トマリヤドの存在と共に自由恋愛に基づいた婚姻が展開されていた。これには、伝統的農村社会の多くが本人の意志と無関係に婚姻の決定されていたことと比して若干の相違がある。

また、結納（タルイレ）後は実質的な婚姻が開始され、男女共双方の家へ自由に行き来することが容認され、泊まることも可能となる。そして、嫁入りによって嫁は婚家に引移り正式な社会的認知と社会的披露がなされるのである。しかし、タルイレの際に贅本人が嫁家を訪れるという事例がみられないことから、形態としては、熊野灘沿岸から伊豆諸島にかけて広く存在する一時的妻問婚とは多少性格を異にする婚姻ということができよう。これら一時的妻問婚のみられる地域では、明確な隠居制が存在する。隠居制を不明確な形とはいえ抽出することができる当地域で、婚姻の形態にいくらかの相違がみられることの背景には、漁業を基盤とする当地域で女性労働力があまり価値を有しないことが挙げられよう。例

えば、小漁師（個人で漁を行う）の場合は船には乗らずオカの仕事をすることであり、一般的にもフノリ・ヒジキ等の採取は女性だが、夫婦で仕事をするのではなく、女性は家事を行い山へタキモノを採りに行く程度であったということである。しかし婚姻の自由恋愛とトマリヤドの存在は、世代階層制といわれる伊豆諸島等の社会構造に類比しても、興味深い問題を孕んでいるように思われる。

トマリヤドというのは、戦後しばらくまで、二十歳付近の近年齢の男子青年同志が、自ら村内のある家にヤドを頼み、そこに寝泊りしていたというもので、これを媒介とした性的交渉はなかったが、自由恋愛の婚姻にとって女性に対する男性側の若者宿的役割を有していたことである。例を挙げれば、先述の(X)氏の家には、(X)氏が子供の頃、(X)氏のオジにあたる男、また母の母方交叉イトコの夫である男、その他の計三名がよくヤドを借りて寝泊りしていたということであるし、当の(X)氏は他の仲間二人と、逆に(X)氏の父方交叉イトコの家（二軒）、更に(X)氏の母の母方交叉イトコの家（子供の頃家に寝泊りに来ていた男の家）の三軒を、時に応じてトマリヤドにしていたという。トマリヤドを媒介に、(X)氏と母の母方交叉イトコとに互酬性がとり結ばれている。これが母方であることにも注目すべきであろう。このように、年齢を同じく

する若者の結合は、伊豆諸島にみられるような世代制の原理を色濃く浮上させる。世代制が最も表象される若者組・青年団に關しては、男子の十六・三十五歳が青年団として活動を行っていた。団では行野浦区の持つ共同山林の一部を所有・維持し、村落を挙げての共同網漁（チゲアミ）が行なわれていた頃には、それに村落の成員として参加した青年団のメンバーに対して、区から祝儀・慰労金が出され、それを資金としていた。活動の方はそれ程活発ではなかったようであるが、一般に、漁村沿岸部にみられる若者組に厳格な規範と制裁規定を有する活動が展開されることは太平洋岸に広くみられる現象である。ただ当地域では村落内においての青年団の位置は相対的に大きなものではなかったようである。

世代制の原理を反映するものとして、このほか、男子の厄年の祝を挙げることできよう。戦前まで、二十五、四十二、六十一歳の厄年にあたる男子は、二月の初午に、チゲ中を呼んで御馳走を振舞った。その振舞いも二段階に分れており、まず村内の戸主のみが招かれ、それに引続いてワカイシユウが招かれるというものであった。二段階の区分はこれも世代原理を示すものといえよう。また、老年の世代の表徴は隠居制と庚申講・念仏仲間の存在である。庚申講は各マチ（前述）毎に一つの単位で存在し、庚申の日に当番家で日待ちを行う

ものである。これに参加するのは各マチの老人達が中心となるのであり、参加は任意とはいえ、老年世代の表徴のひとつとすることができ。また念仏仲間は前述の如く葬送・年忌にあたつてその役割を執行する老婆たちであり、現在五名である。

以上の点を整理したのが表3である。行野浦内の世代を大きく三つに区分し、各々にメルクマールとなる制度及び各の通過段階に於ける制度的儀礼（個人の通過儀礼は除く）としての厄年祝を設定した。勿論伊豆諸島等にみられるような明確な形で世代階層制をとる訳ではないが、以上の諸要素から抽出したモデルとして示したものである。

表 3 行野浦の世代階層と年令

年令	各世代の原理
～70	庚申講 念仏仲間
60	隠居 <厄年祝>
50	ホンヤク
40	<厄年祝>
30	青年団
20	トマリヤド <厄年祝>
10	

最後に、この表3にも示した隠居慣行について触れておく必要がある。この地域では、概況でふれたように現在でも老人の夫婦あるいは独り暮らしの家を数軒見出すことができ、それらは息子夫婦らと居住を異にする隠居である。(X)氏の事例を示そう。現在八十一歳の(X)氏は六十一歳の時、妻と二人で息子夫婦の家から小河川を挟んで隣接する土地に自分の住む家を新築した。この土地は(X)氏の長女の婚家(村内)の畑だったものである。この年は長男(アニキ)が二十八歳で結婚した年であり、長男の結婚が契機となっている。そしてこの時からホンヤクを退いて長男に譲っている。隠居者はインキョヤクともいわれる。しかし財産は長男の家も全て(X)氏の名義となっており、(X)氏は自己の営む漁で自ら夫婦の生計をたてていた。七十歳のとき妻が死去したが、このときの葬儀は長男の家から出した。この(X)氏の例では、隠居慣行も別棟・別食・同財である。このように当地域の隠居は長男の結婚を契機に別居する事例が多く見受けられるが、未婚の子女を連れて出る例は見出し得なかった。隠居者の家は隠居をしても他地域の隠居制のように分家として扱われることはなく、家として容認されたものではない。従って永続性も有しないのであり、もし隠居者が死亡した場合は長男家の帰属となるようだが、長男の長男が嫁を貰う際に、再び長男の隠居家となるという。

以上のように、伊豆諸島にみられるように、一時的妻問婚が、親子二世代不同居の原理を基軸に隠居制と結合している構造とは、当地域は直接的には連関しない。しかし不明確にせよ隠居慣行に親子二世代不同居の意識が作用している点は見逃せず、また自由恋愛を中心とした婚姻形態は、太平洋岸の文化に連なる社会構造の比較研究の必要性を惹起せしめるものである。それは更に、同じ熊野灘沿岸の志摩地方にみられる明確な隠居制との関連においても同様なことであろうと思われる。

#### おわりに

以上の様に、当地域の社会構造は、親族構造では同族的要素が欠如した単系・父系出自がみられ親族関係においては父方にゆるやかな傾斜を現出するとはいえ、親族名称や家の継続性にみられる諸要素、或いは世代制の原理等、権威的支配関係の欠落した比較的等質性の高い村落の社会関係が見受けられた。そしてこれら諸要素が熊野灘沿岸を通じて志摩地方その他にいかに連鎖されていくか、或いはその社会構造の差異・異質性をどう規定してゆくかという比較による地域性が問題となつてこよう。更に等質的村落の中での社会的指導者層とそのソシオグラムの位置づけ・あり方は、今後の親族の

時間的推移の中での力動的構造、ダイナミズムを念頭において動態分析を行うことで、どうそれらと関わっていくのかが重要な視点になってくると考えられる。

本稿は調査事例も限定され、時間等の制約から、本格的考察を展開できなかったが、それら諸点については他日を期したい。

# 注

(1) 光吉利之「農村の家族と親族」姫岡勤・上子武次編『家族—

その理論と実態—』一九七一年、川島書店、一四五—一六四頁。

(2) 光吉利之「親族組織の動態分析」山根常夫・森岡清美編

『現代社会学の基本問題』一九六八年、有斐閣、一六三—一八三頁。

(3) 光吉、前掲書、一五〇—一五五頁。

(4) 蒲生正男『増訂・日本人の生活構造序説』一九七八年、ペリ

かん社、一九一—一九二頁。

(5) 蒲生、前掲書、二二四頁。

(6) 蒲生、前掲書、二二六頁。

(7) 『明治大学政経学部社会学関係ゼミナール報告』一九六八年、

明治大学、一一—一二頁。

同書は一九六七年に行野地区の調査を行った報告書である。

(8) 喜多野清一『家と同族の基礎理論』一九七六、未来社、三七頁。

(9) 喜多野、前掲書、九頁。

(10) 部落内婚率は昭和四十二年で五五・四パーセント、旧村内を含めると七四・五パーセントの高率となっている。

明治大学、前掲書、五二頁。

# (付記)

本稿を成すにあたり、行野浦地区の皆様には調査において多大の御世話になりました。公平を期し個々の御名前を掲げることは控えさせていただきますが、改めて謝意を表したいと思います。また、調査に御協力いただきました八木透氏・和田光生氏にも深謝申し上げます。

(大学院博士前期課程)